

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか

— 資料紹介を中心として —

橋 谷 弘

ABSTRACT

The Imo Incident (壬午軍乱) that occurred in Korea in 1882 was one of the triggers for a major shift in Japan's policy toward Korea and the Japanese view of Korea. The mass media that reported this incident to the Japanese people include not only newspapers but also various publications. This paper investigated publications such as Nishiki-e and Esoshi published in 1882, and introduced their contents, publication form, and background of publication. These publications were not based on sufficient research and were often similar in content, but they gained and influenced a large number of readers.

- 1 はじめに
- 2 錦絵にみる壬午軍乱
- 3 出版物にみる壬午軍乱
- 4 おわりに

1 はじめに

東京経済大学図書館では、徐京植・前館長の下で同大学 120 周年記念事業の一環として、桜井義之文庫（以下、桜井文庫）と四方博朝鮮文庫（以下、四方文庫）の中から錦絵や写真集などの画像をデジタル化する作業に着手し、現在はデジタルアーカイブとして公開されている¹⁾。筆者も検索データの整理などをお手伝いしたが、その作業の過程で再認識したのが、壬午軍乱に関する資料の多さである。たとえば桜井文庫の錦絵では、132 点のうち 51 点が壬午軍乱を主題としている²⁾。

壬午軍乱は、当時の日本では朝鮮事変とも呼ばれ、1882 年にソウルで起きた軍人反乱をはじめとする一連の政変である。背景には、日本に訓練された新式軍と朝鮮王朝の従来の軍との軋轢、国王の父・大院君（李^イ晙^{ハウン}応）の勢力と王妃・閔妃（^{ミン}嬪^ビ ^ミ暎^{ソン} 皇后）の勢力との対立

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか

などがあった。また、日本との関係ではソウルの日本公使館が焼き打ちされ、外交官や警官・軍人などが殺傷された。壬午軍乱については多くの研究があるので、ここでは概略の紹介にとどめるが、日本の対朝鮮政策や朝鮮観が大きく転換する契機の一つとされる。本稿は、この壬午軍乱を日本の民衆に伝えるにあたって、新聞と並んで主要なメディアとなった錦絵や絵草子などの出版物について、その内容や刊行の形態、成立の背景などについて紹介する。

壬午軍乱から甲申政変、日清戦争に至る時期の日本人の朝鮮観の変遷については、上垣外 [1994] が言及している。その主たる検討対象は中江兆民と福沢諭吉の朝鮮観だが、1882年に朝鮮関係書籍が多数刊行されたことにも着目されている。ただ、そこで紹介された戯作者の本が、この時期の朝鮮観の多様性を示す編集方針のあらわれだという解釈は、後で検討するようにやや強引と思われる。次に、壬午軍乱に対する様々な立場からの議論を検討した論考をみると、長谷川 [1989] は、自由民権運動各派の新聞・雑誌記事を分析し、朝鮮の独立支援や武力介入など様々な主張がみられても、結局、朝鮮を日本の「藩屏」とみる点は共通であると指摘している。一方、民権派とは異なる福沢諭吉らの『時事新報』を分析した青木 [1980] は、朝鮮を文明によって開化させるという独善的な理想主義のもとで、伝えられた情報の変化や清国の動向などに応じて、福沢らが対応を模索する様子を紹介している。また、熊本にあった国権派団体・紫溟会の主張を検討した長野 [1996] は、西洋列強と対抗するために日本・朝鮮・清国の連帯を説いていた紫溟会が、壬午軍乱のあと軍備拡張論に転じるまでの論調を跡付け、それ以前の研究で注目されていたアジア連帯論に対して、そこに内在する限界と問題点を指摘している。地方社会の議論という点では、野田 [2002] が大分県の地方紙『田舎新報』を取り上げ、甲申政変・甲午改革・清仏戦争への反応を紹介している。地方紙における国際問題の論説の少なさを含めて、全国紙との違いが興味深いのが、本稿との関連では、報道記事が全国紙や電報からの転載で構成されたという点が、後述の刊行物の事例と共通しており留意すべきである。また、本稿と関連する民衆の朝鮮観への影響という点から興味深いのが日置 [2016] で、河竹黙阿弥を立作者とする二つの歌舞伎を取り上げながら、当て込みや見立ての手法によって事件がどのように描かれたかが論じられている。これについては本稿で後述する。また、桜井文庫の旧蔵者の桜井 [1964] には、「朝鮮関係の『錦絵』について」・「明治時代の対韓意識について」という二つの書誌・解題が収められている。

なお、先行研究では多くの新聞記事が資料として用いられているが、壬午軍乱に関する主要な記事は、宮武 [1932] に関連資料とともに網羅的に収録されている。本稿で引用する新聞記事は基本的に同書に依拠し、新聞名と日付のみ示した。また、新聞記事以外にも本稿における引用文、書名、人名などは、原則として旧字を新字に改めて適宜ふりがなを補い、カタカナや変体仮名も平仮名に改めている。

上述のような、新聞研究を中心とした先行研究を踏まえながら、本稿では当時の日本の民衆が広く目にするのができた錦絵や絵草子などの出版物について、桜井文庫や国会図書館

などの蔵書を用いながら紹介していく。ただし、そこにみられる朝鮮観や民衆の受容のあり方を本格的に分析するには、壬午軍乱だけでなく甲申政変、日清戦争から韓国併合に至る一連の歴史の中で検討する必要がある。このため、本稿ではそれを本格的に議論せず、前提となる資料の紹介や解題を中心に論じていきたい。

2 錦絵にみる壬午軍乱

江戸時代の浮世絵木版の系譜に連なる錦絵は、幕末・維新时期に横浜絵・開化絵・新聞錦絵などの新たな主題を生み出したが、壬午軍乱でも多くの新聞錦絵が出版された。『郵便報知新聞』1882年9月6日は、「朝鮮変乱の状を描きし錦絵は府下の人々が購得するのみならず田舎より^{おい}逐かけ逐かけ注文が来るので何れの板元も刷立てが間に合はぬ程なり」と伝えている。図1は、少し後の日清戦争当時の絵草子屋の様子を伝える絵だが、錦絵を見る人々が店頭の人だかりを作っていることがわかる。

冒頭に述べたように、桜井文庫には壬午軍乱の錦絵が51点あり、主題別に最も多くの点数を占めている。これを、描かれた主題別に整理し、他の所蔵機関との重複を示し、さらに早大古典籍データベースから桜井文庫に無い錦絵を抽出して加えたものが、表1である。錦絵は、近年になって全国の所蔵機関でデジタル化されて公開が進んでおり、表1は壬午軍乱関係錦絵の全国版所蔵目録としては、おそらく完全ではない。しかし、宮武[1932]の「当時の事変を描ける錦絵の数々」にあげられた31点のうち28点が表1に含まれていることから、主要なものはここに網羅されていると考えてよいだろう。

錦絵に関しては、壬午軍乱以外の朝鮮関係の主題も含めて研究や出版が進んでいるので



図1 War in the East. A Street Scene in Tokio, "The Graphic", 1894. 11. 24

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか

表1 壬午軍乱関係の錦絵

請求番号	題名	絵師	版元	主題事項	他機関所蔵	
4042	朝鮮変報 第二	安達吟光 [吟光]	福田熊次郎	日本公使館員脱出	1枚のみ早大古典籍総合データベース	
4044	朝鮮変報	安達吟光 [吟光]	山本与市	日本公使館員脱出		
4045	朝鮮事変	安達吟光 [吟光]	植木林之助	日本公使館員脱出		
4051	朝鮮激徒防戦ノ図	橋本周延 [楊州周延]	山村鉦次郎	日本公使館員脱出		
4052	朝鮮事件記	橋本周延 [楊州周延]	綱島亀吉	日本公使館員脱出		
4053	朝鮮変報	橋本周延 [楊州周延]	宇野平吉	日本公使館員脱出		
4054	朝鮮変報	橋本周延 [楊州周延]	大倉四郎兵衛	日本公使館員脱出		
4055	朝鮮人暴徒ノ図	橋本周延 [楊州周延]	山村鉦次郎	日本公使館員脱出		
4056	朝鮮変報 激徒暴発之図	橋本周延 [楊州周延]	小林鉄次郎	日本公使館員脱出		
4062	朝鮮暴徒防禦図	歌川国松 [一応斎国松]	綱島亀吉	日本公使館員脱出		
4064	朝鮮事件	歌川国松	水村常五郎	日本公使館員脱出		
4081	朝鮮暴動記	豊原国周	神山清七	日本公使館員脱出		
4083	日本名刀世界の誉	守川周重	福田熊次郎	日本公使館員脱出		
4107	朝鮮済物浦図	歌川周重	山村鉦次郎	日本公使館員脱出		
4108	朝鮮変報 激徒暴戦之図	歌川国松	宮沢政太良	日本公使館員脱出		
4046	朝鮮伝聞記	安達吟光 [吟光]	神山清七	済物浦条約		
4059	朝鮮事変 花房君朝鮮国 問罪師為而着港之図	橋本周延 [楊州周延]	山村鉦次郎	済物浦条約		
4060	朝鮮変報	橋本周延 [楊州周延]	鹿島松次郎	済物浦条約		
4061	朝鮮平和談判図	橋本周延 [楊州周延]	浦野浅右衛門	済物浦条約		
4065	再報 朝鮮伝聞記	歌川国松 [一応斎国松]	綱島亀吉	済物浦条約		
4066	日韓紛議結局談判之図	歌川国松	井沢菊太郎	済物浦条約		
4070	朝鮮向問罪之図	歌川国利 [梅寿国利]	森田むめ	済物浦条約		
4073	花房公使 朝鮮国応接之図	歌川芳宗 [二代目一松斎 芳宗]	木村清助	済物浦条約		
4075	花房公使 朝鮮国応接之図	尾玉永成 [東洋齊斐章]	大倉孫兵衛	済物浦条約	函館市中央図・岡山県立図・東大総合図	
4076	朝鮮事変治大吉報之図	尾崎年種 [一蓉年種]	松木平吉	済物浦条約		
4082	鶏林始末	豊原国周	松尾国蔵	済物浦条約	早大古典籍総合データベース 静岡県立中央図書館	
4037	朝鮮大戦争之図	小林清親 [方円舎清親]	原胤昭	日本公使館襲撃		
4041	朝鮮変報 第一	安達吟光 [吟光]	福田熊次郎	日本公使館襲撃		
4047	朝鮮変報録	橋本周延 [楊州周延]	橋葉周平	日本公使館襲撃		
4048	朝鮮変報録	橋本周延 [楊州周延]	鹿島松次郎	日本公使館襲撃		
4049	朝鮮事件	橋本周延 [楊州周延]	森本順三郎	日本公使館襲撃		
4067	朝鮮変報	歌川国松 [一応斎国松]	大倉半兵衛	日本公使館襲撃		
4069	朝鮮暴徒記	歌川国利 [梅寿国利]	森田むめ	日本公使館襲撃		
4071	朝鮮暴動記	歌川豊宣 [一陽斎豊宣]	小林鉄次郎	日本公使館襲撃		
4039	朝鮮電報録	小林清親 [方円舎清親]	舟津忠次郎	閔妃殺害		
4057	朝鮮国王城ノ図	橋本周延 [楊州周延]	三浦武明	閔妃殺害・日本公 使館襲撃		
4058	朝鮮変報録	橋本周延 [楊州周延]	橋葉周平	閔妃殺害		
4038	朝鮮電報録	小林清親 [方円舎清親]	舟津忠次郎	下都監襲撃		
4043	朝鮮変報	安達吟光 [吟光]	山本与市	下都監襲撃		
4074	朝鮮和議上告之図	歌川芳宗 [一松斎芳宗]	木村定五郎	奏聞		
4077	朝鮮平定奏聞図	歌川国明 [蜂須賀国明]	福田熊次郎	奏聞		
4072	朝鮮事件	永嶋虎重	長谷川其吉	日本海軍	静岡県立中央図書館	
4040	朝鮮暴徒細見の図		加藤富三郎	その他		
4050	朝鮮事変絵入話			その他		
4078-01	朝鮮暴徒の新説 第一号		[瀬原捨松]	その他		
4078-02	朝鮮暴徒の新誌 第二号		[瀬原捨松]	その他		
4078-03	朝鮮変報話 三号		[瀬原捨松]	その他		
4078-04	朝鮮扁ん報話 四号		[瀬原捨松]	その他		
4078-05	朝鮮変報話 五号		瀬原捨松	その他		
4079	朝鮮報知録	内田由兵衛 年梅	石川万助	その他		
4084	動物館ニテ子牛暴狗に囁 れたる戯	小林清親	原胤昭	その他		
早稲田大学 古典籍総合データベース						
1	朝鮮電信外	長谷川小信 [小信]	加藤富三郎	日本公使館襲撃		
2	朝鮮電信外 第1号		加藤富三郎	その他		



図2 桜井 4057「朝鮮国王城ノ図」

(姜 [2007]・尹 [2014]・박 [2005], 本号所収の青木 [2022]・向後 [2022] など), 本稿では内容まで立ち入った分析は行わず, 大まかな出版事情だけを見ることとする。

まず描かれた主題をみると, 最も多いのが, 襲撃を受けた公使館員がソウルを脱出して仁川から日本に向かうまでの過程を描いたもので, 15点にのぼる。これに関連して, 公使館が襲撃された場面が9点あり, 合わせて24点で全体51点の約半数を占める。これらの主題は, 後述する絵草子の主題とも重なり, そのドラマティックな展開が人々の興味を引いたものと思われる。

ドラマティックな展開という意味では, 上述の『郵便報知新聞』の記事で, 閔妃毒殺(誤報)と公使館襲撃を一つの画面に描いた歌川国松「朝鮮事件之内王城後宮之図」の売行きが, 「第一等」だといわれているのもうなずける。この絵の現物の所蔵は確認できなかったが, 宮武 [1932] に写真が掲載されているので, ほぼ同じ構図の桜井 4057の橋本周延「朝鮮国王城ノ図」を図2に掲げておく。このように, 絵師は違っても構図がほとんど同じという事例がみられるのも, この時期の出版の実態を物語っている。

もう一つ主題の集中しているのが, 壬午軍乱の処理を日朝間で取り決めた済物浦条約を扱った錦絵で, 11点が残されている。日本側に有利だった条約の内容と, 交渉にあたった花房義質公使が朝鮮側に詰め寄るという場面設定が, 庶民感情に受け入れられたのだろう。

その他, 事件の発端となった下都監における新式軍襲撃や, 壬午軍乱後の事後処理の天皇への奏聞などが並ぶが, 主題ではなく描き方に特徴のあるのが4067・4081・4082・4083・4107である。これらの絵では, 登場人物が歌舞伎役者の化粧をして, 役者名が入ったものもある。これが実際の公演の一場面なのか, それとも単なる見立てなのかは確認できなかった。しかし, 後述の3-③にあるように, 壬午軍乱に関連する歌舞伎の演目や台本が存在するので, これらの絵にも何らかの背景があるのかもしれない。

もう一つ特徴がみられるのは, 表1の事項欄に「その他」と示した錦絵である。一般にこ

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか



図3 桜井 4050 「朝鮮事変絵入話」

の時期の新聞錦絵は大判三枚組で一画面を構成しているが、この「その他」の絵は判型も構成も異なっている。4040「朝鮮暴徒細見の図」は木版多色刷りだが錦絵というより地図で、壬午軍乱に関連したソウル・仁川付近の地形や地名と、日本公使館襲撃事件関係者の氏名が記されている。同じ加藤富三郎の刊行した早大1・2は一枚ずつ独立しているが一連のものともみられ、後述の桜井 4078 と紙面構成は異なるが同様の販売形態だったのではないだろうか。また、加藤富三郎が冊子体で出版した桜井 2535 には、線画の挿絵で早大1 とほぼ同じ構図のものがみられる。このように様々な形態の出版物は、大阪で刊行されたものに多いようである。4050「朝鮮事変絵入話」(図3)はコマ割り漫画のような構図で、第1号から第6号まで各コマのタイトルは記されているが本文はなく、これもどんな読まれ方をしたのか不明である。「九月大新板」と筆で朱書きされているのをみると、宣伝用の引札のようなものだったのだろうか。4078の5枚組は、図4のように絵とともに文章がある。一般的な錦絵にも枠内に文章が付けられているのだが、これは紙面構成が異なり続きものである点で、次の項目で取り上げる絵草子に近いものである。版元の瀬原捨松は、錦絵よりも引札や団扇絵を中心に出版していたようである。4079「朝鮮報知録」も絵と文章の組合せだが、こちらは二枚一組で、その中に壬午軍乱の発端から済物浦条約まで全ての経緯が綴られている。版元の石川万助は、西南戦争物の錦絵新聞『浪花珍聞』の発行者と同一と思われる、その延長上にあるのだろう。4084「動物館ニテ子牛暴狗に噛たる戯」は、『郵便報知新聞』9月6日付で「評判殊に高く発売高万余に及びしといふ」と紹介されている小林清親の風刺画だが、これについては青木 [2022] を参照されたい。

ところで、これらの絵のうち 4050・4078 と錦絵 4069 に、佐山という人物(「鬼佐山」「佐山某」「対州勇士鬼佐山某」)が登場する。一連の錦絵に登場する多くの人物名は、ほとんど誤字もなく正確に記されているのだが、この佐山は関連史料に見当たらなかった。4078-05によれば、佐山は「共同商会の通弁」で「対州(注:対馬)人にて臂力^{りよりよく} 飽^{つよく}まで強幼年の頃



図4 桜井 4078-05「朝鮮変報話」第5号

より韓地往復し^{かの}彼言語事情に通曉せる」といわれている。いずれにしても、公使館に詰めかけた朝鮮人を相手に、「鬼」「勇士」といわれるような「活躍」をみせる人物の描写には、民衆がこのような錦絵に何を求めたかがあらわれているのだろう。

3 出版物にみる壬午軍乱

壬午軍乱について広く伝えたメディアには、錦絵のほかにも、様々な形態の出版物がある。本稿で、「出版物」という漠然とした名称を用いた理由は、錦絵と同様にこの時期が江戸時代以来の大衆本としての絵草子（草双紙）の終焉期にあたり、印刷技術も木版だけでなく石版・銅版・活版などが導入されて多様化し、東京と京阪では出版事情に違いがみられるなど、具体的な出版形態を一つの用語で表すことが難しいからである。絵草子に限っても、明治期のものは研究者によってそれを表わす用語が異なり（磯部 [2002], 佐々木 [1997]・[2006], 高木 [2009], 本田 [1988] など）、さらに本稿で取り上げる資料にはこの範疇に入らない出版物も含まれている。

今回参照した資料は、桜井文庫・国会図書館・早稲田大学でデジタル化して公開されているものだが、それ以外の資料も含めて、「国会図書館サーチ」で「朝鮮」と「1882年」を検索語として調査した結果を表2に示してある。これを宮武 [1932] の「新聞の記事論説を抜載せし単行本」に掲げられたリストと比較すると、宮武本に掲載された26タイトルのうち、20タイトルが表2にみられる。逆に表2にあって、宮武本に無いものが19タイトルある（地図などを除く）。こうしてみると、1882年に発行された壬午軍乱関係の出版物の大部分

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか

表2 壬午軍乱関係の出版物

番号	書名	内容	著者・編者	出版社・版元	発行地	備考
東京経済大学 桜井義之文庫						
2009	朝鮮処分集論：附暴動顛末 第1-2篇 ※	1	福城駒多朗 (編集兼出版者・奥付)	椿香堂・文盛堂 (発兌・表紙) 柳原友吉 (発兌元・奥付)	東京市日本橋区	※ 第1篇は四方文庫 0744
2010	朝鮮近情	3	福城棟洲 (編集・巻頭)	望月誠 (出版人) 兎屋誠 (発兌元)	東京市京橋区	
2011	日韓紛議政略集論	1	根村熊五郎 (編輯人)	甘泉堂・井冽堂・柳心堂 (発兌・表紙) 平山武四郎 (出版人・奥付)	東京市京橋区	
2095	韓紅大倭錦 筋書	3	芳川俊雄 [春談]	宮田伊助 (編輯兼出版人) 本伊板 (表紙)	東京？	
2526	朝鮮變動記 上・下 第2号上・下	2	宮田伊助 (編輯兼出版人) 一麗斎 重(画・表紙) 永島虎重 (画・巻末)	延寿堂 (梓・表紙) 延寿堂丸屋小	東京市本所区	
2527	総本朝鮮異聞 初篇-3篇	2	岡本湖月 (編) 楊州閑延 (画)	林鉄次郎 (奥付)	東京市日本橋区	
2528	朝鮮詳事 上・下	2	藤西真三 (編輯) 稲野年恒 (画)	金英堂 (梓・表紙) 関根孝助 (出版人・奥付)	東京市本所区	表紙題名は「朝鮮洋事」だがふりがなは「てうせんしやうじ」
2529	朝鮮異報詳聞 第1-2編	1	水越衆吉 (編輯兼出版人)	水越衆吉 (編輯兼出版人) 四通社 (発行・表紙 発売所・奥付)	東京市京橋区	
2530	絵入朝鮮暴動全記 第1号	1	菊地義光 (編輯人) 榎州居士 (起稿・巻頭)	明軒堂 (表紙) 高梨弥三郎 (出版人・奥付)	東京市浅草区	
2531	朝鮮暴動実記 2篇	2	岡田良策 (編)	岡田良策 (初篇上表紙に岡田版)	東京市浅草区	初篇表紙は「朝鮮暴徒実記」(下記早大所蔵)
2533	絵入朝鮮奇聞 第1号	1	池部東三 (編集)	金松堂 (梓・表紙) 辻岡文助 (出版人・奥付)	東京市日本橋区	
2534	絵入朝鮮変報録 第1号-第14号	1・2	渡辺文京 (編輯・巻頭) 渡辺義方 (編輯人) 稲野年恒 (画・巻頭)	加藤富三郎 (編輯出版人)	大阪府西成郡	本文冒頭は「朝鮮事情 第1編」
2535	朝鮮電信録 初篇	2	加藤富三郎 (編輯出版人)	加藤富三郎 (編輯出版人) 綿喜 (完捌処)	大阪府西成郡	本文冒頭は「朝鮮電報録 第1号」
2536	朝鮮変報電信録 第1号 附京城井二仁川府済物浦略図	1	福尾房吉 (編輯兼出版人)	水月堂 (発兌・表紙) 太悦堂・福尾水月堂 (大売捌所・奥付)	大阪府西区	
2537	朝鮮乱民襲撃始末 第1-3編	1	山本憲 (編輯兼出版人)	山本憲 (編輯兼出版人) 弘文南舎 (発兌)	岡山西大寺町	
2538	絵入朝鮮かなよみ急報 第1報-第5報	1	佐野鯛次郎 (編輯兼出版人)	佐野鯛次郎 (編輯兼出版人) 商弘所 (発兌元)	東京市京橋区	
2539	朝鮮電報録 第1回~第12回	2	佐藤三次郎 (画工兼出版人)	佐藤三次郎 (画工兼出版人)	東京市日本橋区	
3014	銅版朝鮮国全図	3	木村文造 (編輯人)	木村文造 (出版人)	東京市日本橋区	
3015	朝鮮国細図	3	福城駒多朗 (編輯兼出版人)	福城駒多朗 (編輯兼出版人)	東京市本所区	
3016	朝鮮全図	3	近藤真季 (著述兼出版人)	山中市兵衛・丸屋善七・松井忠兵衛 (発兌書肆)	東京市芝区	
国会図書館 デジタルアーカイブス (桜井文庫と重複するものを除く)						
1	絵入朝鮮変報録 第3-4号	1・2	渡辺文京 (編・巻頭)	広告舎 (発兌・表紙) 中山録朗 (翻刻出版人・奥付)	山梨県甲府桜町	特 52-582
2	宣戦講和朝鮮論集 第1. 2篇	1	峰島晋太郎 (纂輯・表紙) 紅雨外史 (纂輯・巻頭)	峰島晋太郎 (編輯兼出版人・奥付) 合翠閣 (表紙) 開新社書房合翠閣 (奥付)	東京市小石川区	特 52-367

3	朝鮮異聞 初篇-4篇	2	小林清親 (編輯人)	武川清吉 (出版人) 沢村屋 (表紙)	東京市日本橋区	特 42-905
4	朝鮮事件新聞字引	3	佐藤三次郎 (編輯人)	木村文三郎 (出版人)	東京市日本橋区	特 57-718
5	朝鮮実報録 1号	1	長尾景重 (編輯人)	大川新吉 (出版人)	東京市日本橋区	特 67-358
6	朝鮮事変詳報 第1編 二仁川府済物浦略図	1	内藤久人 (編輯・表紙 編輯兼出版人・奥付)	内藤久人 (編輯兼出版人) 駁々堂 (発兌)	京都寺町御池	特 67-358
7	朝鮮事変額未録 第1編	1	山名太喜弥 (編輯人)	内藤伝右衛門 (出版人)	山梨県甲府常磐町	特 54-631
8	朝鮮修好規則	3	橋崎隆存 (編輯・表紙 編輯兼出版人・奥付)	明昇堂 (表紙) 浜本伊三郎・中野啓蔵 (出版人・奥付)	大阪府東区	C2-011
9	朝鮮變遷録 附宣戰婚論	1	篠原禎一郎 (編) 磯山克太郎 (校)	堤正平 (出版人) 稟告に好文堂編輯局	千葉県香取郡	特 52-592
10	朝鮮伝信録 卷1	1	広根至宣 (編輯・巻頭 編輯兼出版人・奥付)	広根至宣 (売捌所は吉岡平助)	大阪府東成郡	特 52-592 神戸大に巻1-3所載
11	朝鮮変事略報	1	原忠重 (編輯兼出版人)	原忠重 (編輯兼出版人)	東京市本郷区	特 52-592
12	朝鮮変報 第1. 2. 4-6号	1	林吉蔵 (編輯兼出版人)	林吉蔵 (編輯兼出版人) 紅英堂 (発兌)	東京市京橋区	特 52-358
13	朝鮮変報摘要誌 第1	1	村山十三郎 (編輯兼出版人)	村山十三郎 (大売捌所は加賀屋善蔵)	大阪府中ノ島	特 67-358
14	朝鮮変報録 第3-4回	1	松村重樹 (編輯人)	水主清尚 (出版人) 国図目録では岡山新報社	岡山県岡山区	特 67-358
15	朝鮮暴動録 第1編	1	久我好懿 (編輯人)	山本義俊 (出版人) 著訳堂 (発兌 書肆)	東京市神田区	特 46-174
16	電報朝鮮事件 第1-3. 5報	1	水谷新八 (編次・表紙 編輯兼出版人・奥付)	錦松堂 (発兌)	東京市芝区	特 52-515
17	電報朝鮮暴動記 第1号	1	楠瀬正利 (編輯兼出版人・表紙) 先愛堂主人 (編輯・表紙)	楠瀬正利 (編輯兼出版人)	高知県土佐郡本町	特 67-358
国会図書館 デジタルデータなし						
18	改定新編朝鮮国全図	3	山田孝之助	開新社	東京	YG913-117
19	新撰朝鮮輿地全図	3	若林篤三郎 (編)	若林篤三郎 (発売は吉岡平助)	大阪	YG915-23
20	朝鮮国細図	3	宇田川幸重 (編)	宇田川幸重	東京	YG913-119
21	朝鮮国全図	3	鈴木敬作	丸屋善七	東京	YG913-122
22	朝鮮全図	3	大村恒七 (編)	大村恒七	東京	YG913-116
早稲田大学 古典籍総合データベース (桜井文庫・国会図書館と重複するものを除く)						
その他機関所蔵 (デジタルデータなし)		2	岡田良策 (編)	岡田良策 (初篇上表紙に岡田版)	東京市浅草区	2篇の表紙は「朝鮮暴動実記」
朝鮮地志						
朝鮮暴動日々の景況 第1-7. 9.11			水上力之輔	轉々堂	宮城県図書館 京都大学法学部図書館	
朝鮮変話			佐藤才治編	田口武四郎	大阪市立大学術情報総合センター	

注1) 原則として原本の記載に合わせ、書名の表記なども統一したため、各所載機関の目録の表記と一致しない場合がある。
 注2) 国会図書館の蔵書につけた番号は、本稿の説明用のもので、分類番号は備考欄に記した。

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか

が、現在も桜井文庫や国会図書館などに残されていると考えてよいだろう。

表2では、桜井文庫所蔵資料を分類番号順に並べ、国会図書館所蔵資料は桜井文庫と重複しないものを50音順に並べたうえで本稿独自の番号を付し（国会図書館の請求記号は備考欄に示す）、さらに両機関に無い早稲田大学などが所蔵する資料も加えてある。以下、資料を引用する際には表2の番号を用いて、桜井2009、国図1のように示す。

現在残されている資料をみると、このような出版物が民衆にどのように頒布され受容されたかを伺わせる手がかりをつかむことができる。一つは、桜井文庫2539『朝鮮電報録』と、国会図書館に所蔵されている同じ題名の本（同一内容なので表1には無い）である。どちらも第1回から第12回で一組なのだが、桜井文庫のものは本来1回ずつ独立していて、1枚おきに「定価三銭」という印字と日付・出版人などが欄外に記されている（図9）。これに対して国会図書館のものは12枚セットで奥付にあたるものが付けられ、そこに「定価十五銭」という印字と桜井文庫にない半丁の大きさの絵が添えられている。日付は桜井文庫が「明治十五年八月十日御届」、国会図書館のものが「明治十五年九月十五日御届」である。これらをみると、事件直後に桜井文庫の体裁のものが2枚セットで次々と分売され、しばらく後に国会図書館の体裁のものが12枚セットで売り出されたと考えてよいのではないだろうか。また、第6回の絵に描かれた部屋の壁に朝鮮地図が掛けられているが、桜井文庫のものは文字や川が見えるのに、国会図書館のものは塗りつぶされている。おそらく検閲の結果ではなく、当初の地図が実際の朝鮮半島と全く異なる大陸沿岸部のような地形になっているので、再版の際に塗りつぶしてそれらしい形に直したようにみえる。後述のように、他にも一枚ずつ販売されたものがあり、冊子の形態をとるものも次々に続報が発行される例が多い。あわただしく売り出された速報やその続報を、人々が争って買い求めた様子がうかがえる。

また、地方への波及については、桜井2534と国図1の『絵入朝鮮變報録』でその実態がわかる。どちらも渡辺義方編輯・稲野年恒画で同じ内容なのだが、桜井2534は出版人が東京市日本橋区横山町・辻岡文助（金松堂）で、明治15年8月15日御届、これに対して国図1は翻刻出版人が山梨県甲府桜町・中山録朗（広告舎）で、明治15年9月1日御届、9月14日（第3号）・22日（第4号）出版になっている。つまり東京で出版された本を、半月から1か月遅れで、甲府でも翻刻し出版したことがわかる。文章や挿絵は同じだが、変体仮名の活字などに差異がみられ、甲府で新たな版を制作したのだろう。今回は東京の機関に所蔵される資料を中心に調査したので、このような事例が確認できたのは一例だけだが、地方図書館等に調査を広げれば、同様の事例が他にも発見できるのではないかと思われる。もちろん、東京や大阪で出版された本も全国へ流通していたことが、多くの新聞広告や、各巻末に付された売捌所の住所などで確認できる。たとえば、桜井2011の発行地は東京だが、裏表紙にはこれを購入した長野県上伊那郡在住者の署名がある。このほか、地方独自の出版物もあるが、これについては後述する。

さらに、読者の動きを示す事例が、桜井文庫 2526 の『朝鮮変動記』で、第2号上・下の見返しの白紙のページに、この本の所有者と思われる人物の書き込みが三か所あり、ほぼ同文で「此本何方へ参り候共 御一覧の上は早速御返し被下度候」などと記されており、所有者名も明記されている。多くの人が絵草子屋や貸本屋を通じて本を手に入れただけでなく、個人間でも回覧されていた様子が見える。

表1に示された出版物の内容は、①新聞記事・論説・電報を転載してコメントを付したものの、②江戸時代の草双紙の系譜に連なるような絵入の読物、③その他、という三種に大別することができる。「内容」欄にその番号を示したが、どちらとも分類し兼ねる本もあり、大まかな目安と考えていただきたい。以下、それぞれの内容と出版事情を紹介してみよう。

① 新聞記事・論説・電報を転載した出版物

圧倒的に多い刊行物は、壬午軍乱に関する新聞記事・論説・電報をそのまま転載してまとめたもので、本の体裁は活版印刷、表紙はタイトルや編者などを記す文字だけが並んだ比較的地味な装丁だが、和綴じのものもある。

発行地は半数が東京で、京阪がこれに次ぎ、版元の多くは地本問屋である。編者には、これらの版元で実用書を中心に広範な分野の通俗書を執筆している者が目立ち、彼らが朝鮮事情や国際問題にとくに通じていたとは思えない。なかには出版人と編輯人が同一のものもあり、後述の兎屋誠のように実際に出版人が執筆したのか、それとも名前を出ない作者の請負なのかは即断できないが、少なくとも専門分野の執筆者でないことは確かだろう。したがって内容は似たり寄ったりで、同一の記事や論説を収録しているものも多く、細かく見れば相互に内容を引き写している部分も見えそうである。たとえば、桜井 2536 の『朝鮮変報電信録』と国図6の『朝鮮事変詳報』は、編者も版元も異なるが、同一の副題が付けられて巻頭の地図は全く同じものである。また、桜井 2009 の『朝鮮処分纂論』は、桜井 3015 の『朝鮮国細図』と同じ福城駒多朗の編輯・出版で、桜井 2009 第1篇巻頭の「朝鮮国細図」は、桜井 3015 の地図とほぼ同じものである。そして、多くの本には特定の主張や編集方針は希薄で、壬午軍乱への社会的関心の高まりに応じて報道記事を要領よく取りまとめ、資料の使い回しもしながら次々と出版されていたことがわかる。したがって、様々な論調がみられるのも、短期間に1冊の本に仕立て上げるために、手当たり次第に記事を転載したことが主たる理由と考えるべきだろう。

たとえば国図6『朝鮮事変詳報』の巻頭には「凡例」があるが、その中で「本編尤も事の確実なる者を取りて之を纂録し務て重複を省き簡明に就き人をして一日瞭然事変の要領を得せしめん」と述べている通り、一か所を除いて出典すら示さずに、事実が年表のように淡々と並べられている。一方、前述の桜井 2009『朝鮮処分纂論』は、各新聞の論説を長々と引用したあと、たとえば「本編は郵便報知新聞の社説欄内に登載する処能く

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか

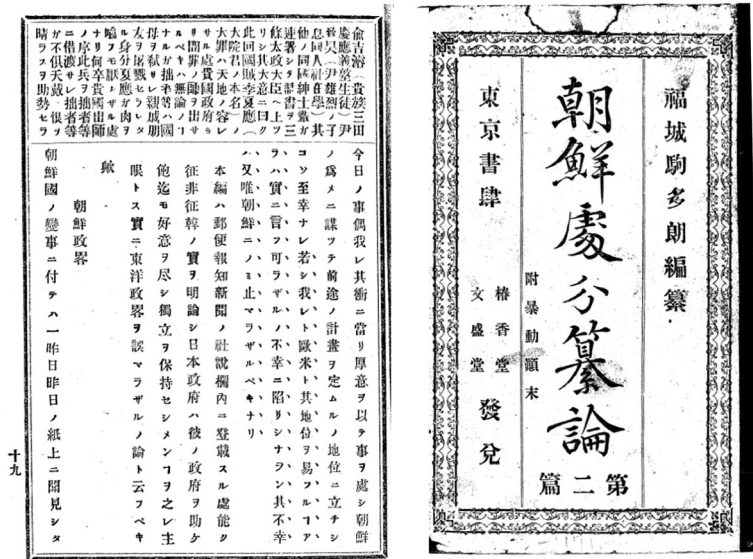


図5 桜井 2009『朝鮮処分纂論』の表紙と本文

征非征韓の実を明論し……」といった五、六行のコメントを付して次の引用へと移り、これと並行して上の欄外に壬午軍乱の経緯や朝鮮事情を書き込むという構成をとっている(図5)。いずれにしても、新聞記事や論説、電報をまとめて壬午軍乱の概要を伝えることを目指したものである。

編者のうち、経歴のわかる者を何人かあげてみよう。たびたび触れた福城駒多朗は株州と号し、詳細な経歴はわからないが、自由民権派の嚶鳴社員・肥塚竜の新聞連載をまとめた『国会論』³⁾の編者となっているので、嚶鳴社に関わる人物とも考えられる。桜井 2530の『絵入朝鮮暴動全記』の冒頭には「株州居士起稿」とあるが、これも福城と考えてよいだろう。福城の本(桜井 2009)の巻頭に序を寄せている関沢政軌(篁園)は、自筆本『豈然堂記』が早稲田大学中央図書館に所蔵されており、儒学の素養のある者のようである。このほか、国図 15『朝鮮暴動録』の編輯人・久我好懿は、友田 [2004] によれば大日本農会の母体の一つ開農義会の機関誌編輯人だった人物だが、壬午軍乱の前年に創立された大日本農会の会員にはならず、農業関係の著書もない。このように、政治団体や社会団体に関わった者も、その活動歴と壬午軍乱や朝鮮問題との強いつながりを見出すことは難しい。

このような中で、編者も内容も異色なのは、桜井 2534『絵入朝鮮變報録』である。前述のように、この本は甲府でも翻刻された。編者の渡辺義方(渡辺文京・花笠文京)は、仮名垣魯文の弟子の戯作者で自由民権運動家、『いろは新聞』『絵入自由新聞』の看板記者でもあった(松原 [2009])。この本は、戯作調の文章があるかと思えば新聞記事のような文章もあり、要所に電報や新聞記事が挿入され、絵入ではあるが活版印刷で表紙には絵がなく、本稿



図6 桜井 2534 『絵入朝鮮変報録』

の①に分類すべきか②に分類すべきか迷うような内容になっている。挿絵も、小説の挿絵や口絵を多数手がけた稲野年恒によるもので、図6のように、後述の絵草子系統の本とはやや異なっている。

この本では、事件の経緯は必ずしも時系列で述べられておらず、しかも随所に「吾輩は……」という編者の意見をはさみ、新聞の論説を引用する時にも「吾輩の意見に符合する至当の処分なるべしと思はる一二の論説を抄録するも無用の事にあらざるべきを信するがゆえ併せて反対論者の議論も載する事とはなりぬ」(第3号)と、単なる羅列に終わらず自分の意見との異同を明確にしながら収録されている。その合間には、戸口・税制・風俗などの朝鮮事情が概説されたり、明らかに他の本と同様の情報が並んでいたり、編者自ら述べるように、「記事の順序動もすれば前後するの患なきを得ずと雖ども簡は前にも陳たる如く一夜漬の急操觚ゆえ宜しくお見宥し前後を照してお読あらんを乞ふ」(第9号)という状態であった。しかし、本稿で取り上げた他の本に比べると、編者の立場や主張は明確である。甲府での翻刻や、表1の中で最多の第14号まで出版されたことなどを考えると、読みやすいとはいえないこの本に、熱心な読者が多数いたということなのだろうか。当時の人々の受容の仕方的一端を物語るものとして、留意しなければならない。

一方、地方都市で発行された本には、地本問屋と通俗書の作者が組んだ東京や京阪の出版物とは異なる事情もみられる。たとえば、岡山の弘文南舎の発行した桜井 2537の『朝鮮乱民襲撃始末』の編輯兼出版人となっている山本憲は、1885年の大阪事件に関与して、檄文「告朝鮮自主檄」を起草した自由党員である⁴⁾。久木 [1990] によれば、高知出身で儒学を学んだ山本憲(梅崖)は自由民権運動に参加し、やがて『大阪新報』社員となるが社内対立

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか

で退社して岡山の新聞社に移り、ここも退社して当時は生活に窮していた。山本自身の記述によれば、「予夫婦は復た朝夕食餌を給するの資無し。会^{また}ま朝鮮乱あり。因^{よつ}て一冊子を作り。以て若干円を得たり」⁵⁾といわれている。その「一冊子」が『朝鮮乱民襲撃始末』なのだろう。この本を執筆したこと、のちに「告朝鮮自主檄」を起草したことの関連については、さらに検討が必要である。同じ岡山発行のものに、国図 14 の『朝鮮変報録』があるが、こちらの編輯人・出版人については詳細がわからず、国会図書館の書誌データでは発行が「岡山新報社」とされているが、この新聞も不明である。奥付の売捌所には、上記の弘文南舎もあるが、岡山の書肆が並んでいるうちの一つにすぎず、とくに関連は考えられないだろう。

また、高知で出版された国図 17 の『電報朝鮮暴動記』の編輯兼出版人・横瀬正利は、経歴不明だが 16 丁に『東洋自由曙』の広告があり、堀詰座（原文では「堀詰産」）で上演された板垣退助遭難事件の芝居の筋書きだという⁶⁾。単に地元の書肆としてこの本の出版に関わっただけかもしれないが、出版人は横瀬の個人名で屋号がなく、この時期の高知の出版物や広告にも横瀬の名が見えないことから、これも自由民権運動とつながりのある人物かもしれない。

一方、山梨県甲府で発行された国図 7 『朝鮮事変顛末録』の出版人・内藤伝右衛門は、絵草子や古着などを商う藤屋の養子で、県の求めに応じて県内初の新聞『峡中新聞』（のち『甲府日日新聞』）を創刊する一方、温古堂の名で 100 種ほどの書籍を出版したという⁷⁾。編纂人の山名太喜弥は、仏教書や歴史書の編者にもなっている。つまり、この本は自由民権運動など政治運動とのかかわりはなく、いわば地本問屋と作者の組合せの地方版のような形で出版されていたことがわかる。このほか国図 9 『朝鮮騒変録』が千葉県香取郡で発行されているが、この本の背景はわからなかった。

以上のように、新聞記事などの集成本の大半は東京や京阪の地本問屋が商業的な成功をねらって出版し、その編者も多分野にわたる通俗本の作者が多かった。自由民権運動と関わりを持つものが何点か見られるが、運動との組織的なつながりよりも、当時の文化人の生業や地方文化のあり方との関わりから捉えた方がよいように思われる。

② 絵入の読物

次に、一連の絵入の読物がある。これらは前項の新聞記事の集成とは異なり、和綴じで表紙は木版多色刷、本文は手書き文字に挿絵の入った木版という体裁で、江戸時代以来の草双紙の系譜を引いている。つまり、歴史物から同時代の事件まで、様々な主題で量産された絵草子の一つである。

編者については、前項の新聞記事の集成と同様に経歴が不明な者が多い。しかし、新聞の集成本と同じく、他の分野で多くの絵草子の編輯人や出版人となっている者がみられる。たとえば、桜井 2526 『朝鮮変動記』の編者宮田伊助は、この本以外にも前年の 1881 年から 82



図7 桜井 2531 『朝鮮暴動実記』2篇上・表紙



図8 桜井 2531 『朝鮮暴動実記』2篇上・本文

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか



図9 桜井 2539 『朝鮮電報録』

年にかけて、『小栗判官一代記』『八百屋お七』『化物嫁入咄』など、国会図書館所蔵だけでも12タイトル20冊の絵草子を出版している。表紙に「本伊板」とあるように、宮田伊助は本屋伊助という地本問屋なので、おそらく本人の執筆ではなく多数の書き手を抱えていたのだろう。そのほかの絵草子も、桜井 2531『朝鮮暴動実記』（図7・8）のように、挿絵と同じページに簡潔な文章が配置され、壬午軍乱の経緯を戯作調に時系列で語っている。

これらの絵草子とは体裁が違うものが、桜井 2539『朝鮮電報録』で、前述の表1で「その他」に分類した錦絵と技法は異なるが、錦絵同様に1枚ずつ独立した摺りものである。これらは、前述のように2枚1組で分売されたようだが、図9のように場面を示すタイトルがあるだけで、文章は全く書かれていない。この点では錦絵の「その他」の分類のものとも異なる。絵も単色刷りの線画で、錦絵のように鑑賞や装飾に用いるほどのものではなく、どのように受容されたのかわからないが、新聞を集成した本などと一緒に見たのだろうか。

③ その他の出版物

上記①・②以外で数が多いのは、地図である。表1の桜井 3014・3015・3016、国図デジタルデータなしの各項目がそれにあたる。これらの地図の多くも、壬午軍乱に関連して出版されたということは、たとえば『日本立憲政党新聞』（大阪）8月9日で「今度朝鮮事変の影響より大阪府下各書林にて朝鮮八道の地図又は該国の地誌歴史等の売捌くる事夥しく……其代価の騰貴せし事亦た驚くべく従来僅に八十銭位の定価なりし一葉の地図にて俄に二円以上にまで騰貴したり然れど夫等に論なく買手は尚ほ続々と詰懸る……」と述べられていることからわかる。

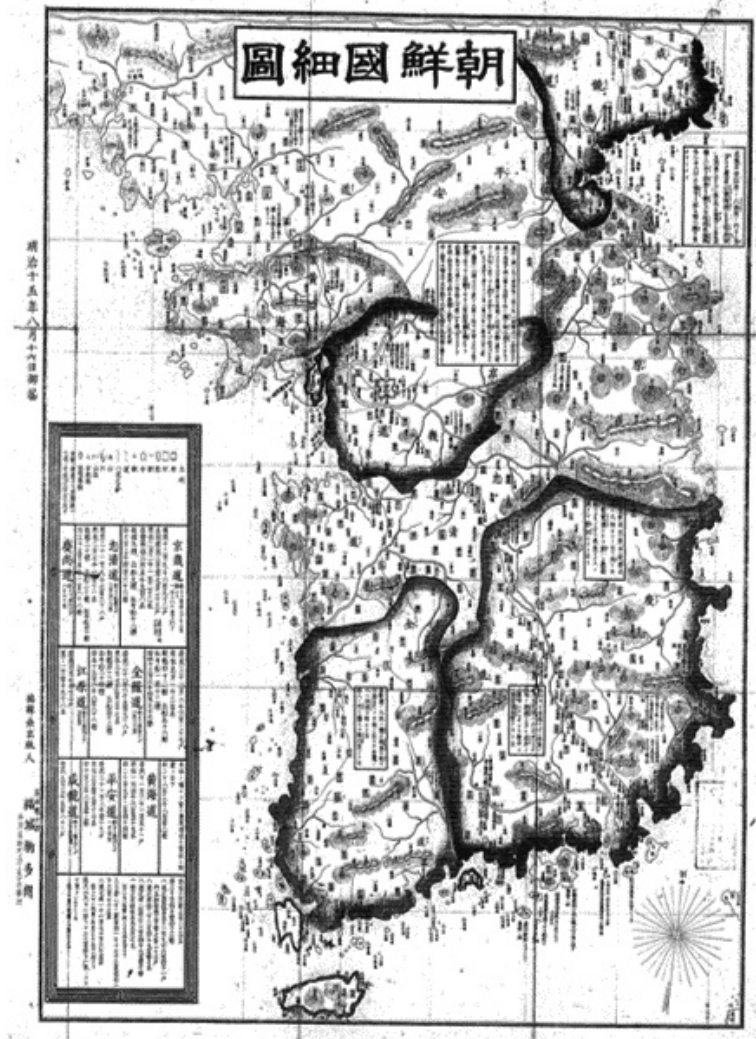


図10 桜井3015『朝鮮国細図』

地図の編者を見ると、桜井3015『朝鮮国細図』（図10）の福城駒多朗は、前述のように『朝鮮処分纂論』の編者で、嚶鳴社に関わるかもしれない人物だが、地図制作との接点はみられない。このほか、桜井3014『銅版朝鮮国全図』の木村文造は、『明治英名百首』などの編者で、これも地図制作との関連は薄い。

一方、桜井3016『朝鮮全図』の著者・近藤真琴は、海軍軍人として兵学校教官を務め、攻玉社を創立した教育家でもあるが⁸⁾、1880年に攻玉社付属陸地測量習練所を設立していた（長谷川・内山 [1990]）。発兌書肆の三者はいずれも大手地本問屋で、とくに松井忠兵衛は『大日本全図』・『東京全図』も発行している。このほか大村恒七は『東京精測新図』など各

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか

種地図の編者、鈴木敬作は『日本地学辞書』の出版者、若林篤三郎は『新鑄支那輿地全図』の編者で、いずれも地図や地理書の制作に携わっている。

このように、編者も発行者も地図制作の経験を持つ者と持たない者が混在するが、共通するのは独自調査の成果や日本の権益主張がみられないということである。たとえば桜井3014の『銅版朝鮮国全図』の凡例には「此図は欧州各国人の諸図に拠り大清一統図歴代地誌朝鮮国図等其他諸図を参訂して之を製し」と述べられていて、地形は測量に基づくものではなく、様々な地図を参照しながら俄に作成されたものであることがわかる。国図18『改定新鑄朝鮮国全図』も、1875年に発行された別の地図とほぼ同一だという⁹⁾。また、桜井3016『朝鮮全図』は、近代測量術に基づく地図なのだが、なぜか「此図韓相柳成竜の著す所の懲毖録に基く」とされていて、説明の多くを文禄慶長の役（壬申倭乱）当時の朝鮮側の記録から引用している。

このような背景を踏まえたうえで、これらの地図から、日本の領域などに対する当時の日本人の認識（というより「無意識」）を探ることも可能かもしれない¹⁰⁾。

一方、上述の『日本立憲政党新聞』の記事では地誌や歴史書の出版にも言及されているが、表1の中で固有の地誌といえるのは、筆者が未見の宮城県図書館所蔵『朝鮮地志』のみであり、歴史書については壬午軍乱との関連が不明なのでこの表には採録していない。しかし、これに類するものとして桜井2010の『朝鮮近情』がある。この本を出版した兎屋誠こと望月誠については、石塚純一〔2000〕が詳しいが、この本の著者・根村熊五郎も、望月誠のペンネームかもしれないという。兎屋（創業時にはうさぎ屋）は、明治初めに銀座で創業した新興出版社で、この本が出された1880年代に最盛期を迎えて「最も羽振りのよい出版社の一つ」となったが、1890年代に突然消滅する。その間に130冊ほどの本を出版し、その多くは通俗的な実用書だったとされる。この『朝鮮近情』は、現代風にいえばハンドブックのような内容で、「政体・王家・地方政制・兵制・法律・租税・宗教・国人の種族・人を挙るの法・国勢沿革史・地理・気候・人民の気風及び風俗・政党」という項目を立て、この時代としてはバランスの取れた簡潔な概説となっている。壬午軍乱については序文に一言触れているだけだが、朝鮮の事情を知るのは「今日之急務」なのでこの一巻を書き、財政外交などの項目については「他日編述」とされている。

また、壬午軍乱に関する新聞記事を読むための参考図書として出版されたのが、国図4の『朝鮮事件新聞字引』である。編者の佐藤三次郎は、前述の桜井2539『朝鮮電報録』の画工でもある。これは文字通りの「字引」で、イロハ順に語彙が並んでその意味が書かれているのだが、必ずしも壬午軍乱固有の用語ではなく、たとえば「咽喉之地 タイセツナルチ」というように難解な語句が解説されている。この字引がどの程度実用になったのかわからないが、1870年代から80年代にかけて、他にもいくつかの「新聞字引」が出版されているので、需要はあったのだろう。ただ、管見の限りでは特定の事件名を冠した「新聞字引」はこの本

だけのようで、これも壬午軍乱の出版ブームを物語るものかもしれない。

いずれにしても、前述の絵草子のような波乱万丈の読物だけでなく、地図や朝鮮事情や字引を参照しながら、朝鮮の具体像を知ろうとする読者もいたことには留意すべきだろう。

他の分野で興味深いのが桜井 2095『韓紅大倭錦筋書』である。壬午軍乱を民衆が知る手段は新聞・錦絵・書籍などの出版物だけでなく、歌舞伎や講談でも上演された。宮武 [1932] 243 ページには、「目今朝鮮暴動記談」という講談の興行広告が引用されている。また、本稿の冒頭で紹介した日置 [2016] は、河竹黙阿弥を立作者とする歌舞伎「張扇子朝鮮軍記」と「偽甲当世簪」を紹介している。前者は文禄慶長の役（壬申倭乱）を題材として、豊臣秀吉と船頭と次兵衛が登場し、大詰の当て込み（最新のニュースなどを用いる手法）で壬午軍乱が取り入れられたもので、市村座で上演されたという。後者は、壬午軍乱を、同時代の東京の鼈甲屋の家庭内紛争に見立てて描き、猿若座で上演されたという。そして、当て込みや見立てといった「偽装」の意味を、当局への配慮という消極面以外に、隣国の出来事を身近に描こうとする「明治前期の民衆の対外問題に対する距離感」に見出すというのが日置論文の主旨で、本稿の主題とも関連して重要な指摘である。一方、この論文の中では、当局に配慮した戯曲の例として、「韓紅大倭錦」が『郵便報知新聞』に連載されたとき、「其筋」の通達で掲載が中止されたことに触れられている。宮武 174 ページによれば、壬午軍乱の修信使・朴泳孝が来日するため、警視総監が郵便報知社長に掲載中止を命じたのだという。演劇の筋書きにも政府が配慮せざるをえないという、この時期の微妙な日朝関係の反映がみられる¹¹⁾。

桜井 2095 は、この掲載中止となった筋書の完全版として出版されたもので、奥付もなく私家版らしい。作者の芳川俊雄（春濤）は報知新聞社員で、岡本勘造（起泉）著・芳川俊雄 閱という組合せで、新聞記事に基づく多数の「明治期草双紙」を鳥鮮堂から出版していたという（高木 [2009] 12 ページ）。この『韓紅大倭錦筋書』の巻頭には、壬午軍乱の「顛末を考ふるに大に劇曲に似たるものあり」と考え、「新聞紙に記する所を取捨し戯れに一篇七齣の劇案を綴り」と成立の背景が記されている。内容は、大院君や花房公使が実名のまま登場する戯曲あるいは歌舞伎の筋書きである。しかし、新聞連載に使った活版を崩さずにおいたものを用いて印刷したと述べられているだけで、上述の掲載中止のことには触れられていない。

4 おわりに

以上のように、壬午軍乱は、新聞報道以外にも錦絵や絵草子など多様なメディアを通じて日本の民衆に伝えられた。その量は、送り手側も受け手側も膨大な数にのぼった。しかし質的には、十分な知識や調査を前提に明確な主張をもって発信されたのではなく、粗製乱造の

壬午軍乱は民衆にどのようにして伝えられたか

きらいがあるものだった。そのような問題があるにせよ、センセーショナルな錦絵の場面や絵草子のストーリーに熱狂しただけでなく、新聞の論説や朝鮮事情を伝える地図やハンドブックなども、多くの人々に歓迎されていたことは注目に値する。しかし、その結果として、客観的で友好的な朝鮮認識が生まれたかどうかは別問題で、引用した日置 [2016] のような「民衆の対外問題に対する距離感」を視野に入れながら検討していく必要があるだろう。

また、多くのメディアの送り手は、執筆者も発行者も他の分野のメディアの作り手とほぼ重なり合っていて、朝鮮問題や国際情勢の専門家ではなかった。したがって、それらのメディアの伝える情報を字面だけで今日的視点から解釈するのではなく、粗製乱造だったという面も含めて、どのような背景をもって作成されたのか、多面的に吟味しなければならない。

また、これらの情報を受け取った民衆が、結果的にどのような朝鮮認識を形成したかを具体的に解明することは、史料や方法論を含めて研究するのが非常に困難な課題である。しかし、それを明らかにしなければ、近代日本とアジアの関係の可能性や問題点を捉えることはできないだろう。

このような様々な課題を検討するための土台として、今回の資料紹介と解題が一助となれば幸いである。

注

- 1) 東京経済大学図書館デジタルアーカイブ <https://www.tku.ac.jp/library/about/collection/cat/index.html>
- 2) 錦絵については、前掲デジタルアーカイブのほか、『東京経済大学図書館所蔵 桜井義之文庫 朝鮮関係錦絵コレクション図録集』東京経済大学図書館、2020年が発行された。
- 3) 肥塚竜著・福城駒多朗編『国会論』甘泉堂、1880年。
- 4) 山本憲『梅崖先生年譜』松村末吉、1931年。大阪事件は、自由党左派の大井憲太郎らが朝鮮に渡って政治改革を支援することを企図し、東アジア情勢を流動化させて日本国内の改革につなげようとしたが、事前に発覚して処罰された事件である。
- 5) 前掲『梅崖先生年譜』16丁。
- 6) 土屋 [2012] によれば、この芝居の作者坂崎斌は愛国公党员で、自由民権運動と文筆活動をつなぐ立場にあったという。
- 7) 「やまなしの偉人たち 31 内藤伝右衛門」(『ふれあい』56, 2018年)。
- 8) 林季樹編『近藤真琴先生伝』攻玉社、1937年。
- 9) 桜井 [1979] 563 ページ。朝鮮地図の系譜と書誌については、同書に収録された「明治期刊行『朝鮮地図』」が詳しい。
- 10) 間島や竹島(独島)をめぐって、のちの時代の認識とこれらの朝鮮地図との差異が指摘されている。たとえば、谷川雄一郎「間島領土交渉をめぐる一考察」(『言語と文化論集』3, 1996年) 197 ページでは、中国側から指摘された日本人の国境認識のあいまいさの一例として、国図 20『朝鮮国細図』があげられている。
- 11) これと似た主題で、船頭与次兵衛を朝鮮人としたり、加藤清正の捕虜として朝鮮王妃・王子を

登場させたりした「太閤軍記朝鮮卷」が1891年10月に歌舞伎座で上演されたが（福地桜痴『太閤軍記朝鮮卷』金港堂、1891年）、王妃・王子が捕虜となる場面に対して、朝鮮公使館から外務省に抗議があったという（岡本綺堂『明治劇談 ランプの下にて』岩波文庫、1993年、185-191ページ）。この公演を描いた錦絵は、桜井4021「歌舞伎座新狂言 太閤軍記朝鮮卷」（1894年）として所蔵されている。

参 考 文 献

- 青木功一 [1980]：「時事新報」論説における朝鮮問題—1—壬午軍乱前後（『慶応義塾大学新聞研究所年報』14）
- 青木然 [2022]：民衆の朝鮮認識を探る史料としての錦絵—壬午軍乱時の小林清親作品を中心に—（『人文自然科学論集』150）
- 石塚純一 [2000]：「うさぎ屋誠」考—明治初期のある出版人をめぐって（『比較文化論叢』5）
- 磯部敦 [2002]：銅版草双紙考（『近世文藝』75）
- 上垣外憲一 [1994]：明治前期日本人の朝鮮観（『日本研究』11）
- 姜徳相 [2007]：錦絵の中の朝鮮と中国—幕末・明治の日本人のまなざし、岩波書店
- 向後恵里子 [2022]：日清戦争錦絵にみる身体の表象—兵士の血と裸身をめぐって（『人文自然科学論集』150）
- 桜井義之 [1964]：明治と朝鮮、桜井義之先生還暦記念会
- 桜井義之 [1979]：朝鮮研究文献誌—明治・大正編—、龍溪書舎
- 佐々木亨 [1997]：明治の草双紙—京阪活版小説を中心に—（『近世文藝』66）
- 佐々木亨 [2006]：活版草双紙の誕生—大阪版より藍泉の独自性に及ぶ（『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』32）
- 高木元 [2009]：十九世紀の草双紙—明治期の草双紙をめぐって（『文学』10-6）
- 土屋桃子 [2012]：板垣退助遭難の芝居—明治15年の作品を中心に—（『岐阜大学国語国文学』38）
- 友田清彦 [2004]：開農義会と『開農雑報』—明治初期の農業結社とその人々—（『農業経済研究』76-1）
- 長野浩典 [1996]：壬午軍乱と対アジア観—紫溟会を中心として（『大分縣地方史』160）
- 野田秋生 [2002]：『田舎新報』の対朝鮮・対清論調—壬午軍乱・清仏戦争・甲申事変期の—（『大分縣地方史』187）
- 長谷川直子 [1989]：壬午軍乱をめぐる自由民権派の朝鮮論（『国際関係学研究』16別冊）
- 長谷川博・内山一男 [1990]：明治初期の陸地測量教育—攻玉社付属陸地測量習練所を中心として（『土木史研究』10）
- 日置貴之 [2016]：時代と世話の「朝鮮事変」—河竹黙阿弥は壬午事変をどう描いたか（井上泰至編『近世日本の歴史叙述と対外意識』勉誠出版）
- 久木幸男 [1990]：民権派儒学者山本梅崖について—その思想形成を中心に—（『教育学部論集』2）
- 本田康雄 [1988]：草双紙合巻から新聞小説へ—開化期文化の底流—（『国文学研究資料館紀要』14）

壬午軍亂は民衆にどのようにして伝えられたか

松原真 [2009] : 自由民権運動と戯作者——「自由党時代」における渡辺文京と野崎左文との比較から (『日本文学』 58-9)

宮武外骨 [1932] : 壬午鷄林事変——諸新聞雑誌所載録, 花房太郎

尹素英 (朴美京訳) [2014] : 明治日本の錦絵は韓国の歴史をどう歪めたか, 韓国独立記念館

박양신 [2005] : 明治시대 (1868~1912) 일본 삽화에 나타난 조선인 이미지 (『정신문화연구』 28-4)